

ブレイクの神

— The Fly についての一考察 —

秋 山 照 男

1

十八世紀のイギリスが生んだ偉大な詩人であり、画家であり、神秘家でもあると言われるウィリアム・ブレイク(1757—1827)の思想と芸術は、近頃ますます世界の文学愛好者の注目と関心を集めているようである。とくに最近、研究者たちの興味の中心は、彼の後期の作品である幾つかのいわゆる「予言の書」(‘Prophetic Books’)の意味の解明に置かれていて、これまで難解晦渋な作として、一般の人々に読まれることの少なかったこれらの長篇の詩にも、次第に明るい理解の光が射し始めていることは、よろこぶべきことである。ただ、ブレイク研究に日の浅い私には、これらの予言書群について詳しく論じる資格は無く、この小論では、常日頃愛読している彼の詩の中からその一篇を選び、それについてたまたま心に浮んだ感想を記し、同時にブレイクが懐いていた神についての考えの一端に触れてみたいと思うのである。

「無垢と経験の歌」(‘Songs of Innocence and of Experience’)は、1794年、ブレイクが37才のとき、彼の創始によるいわゆる「光彩版画」(illuminated printing)として、自ら刊行した、英文学史上劃期的な詩集であることは、周知されているところである。いま、私の手もとにあるオクスフォード版の複写本(1977年刊)によると、それは表紙と口絵を含めて54枚の版画から成り、その中味は大きく二部に別れていて、前の「無垢の歌」の部分が27枚(この二部に共通な表紙の絵を除くと26枚)、後の「経験の歌」の部分が27枚である。ついでながら、これらの版画の中に印刷されている歌の数は、前者の部が19、後者の部が26である。合計45篇のこれらの歌には、それぞれの内容にふさわしい、美麗な色彩の絵または装飾模様が伴っていて、それらは見るだけで楽しい気持ちを起させるものである。画家であり詩人でもある、いわば「複合芸術家」とも言うべきブレイクにしてはじめて可能な、魅力ある新しい様式である。色彩は

多くの種類が用いられており、ブレイクは一通り色をつけて印刷したあとでも、筆やペンでさらに彩色したらしく、色は各々の版で少しづつ異なり、晩年のものほど出来ばえが良いとケインズは言っている。ちなみに、²⁾現在各国の蒐集家の手もとに残されたこの詩集の部数は、わずかに²⁾27である。

「無垢と経験の歌」は、M・ボウラも言うごとく、³⁾ブレイクが生前自らの手で編集し刊行した唯一の詩集であり、(彼は晩年に至るまで、注文する者があれば、それを印刷して売り渡した)その製作には並々ならぬ苦心が払われたというだけでも、彼の作品中重要な地位を占めるものである。しかし、それ以上に、文学的立場から見た場合、ブレイクの芸術的完成の一つの頂点を示すものとして、その意義は極めて大きいことは、あらゆる評家の一致して認めるところである。ここには彼の思想の根源的なものが、あまたの宝石のように、燦然として結晶している、と言うことができよう。ところで、一見何の難解さも無いように見えるこれらの短い詩篇の群——最も長いもので52行である。しかもそのような詩はごく少なく、多くは8行ないし20数行である——の中には、外観上の単純・明快さにもかかわらず、否むしろその故に、意味の捕えにくい含蓄の深い作品が、そこここに散見されるのである。一篇の詩は言うまでもなく一個の渾然たる芸術作品であり、そのあるがままの姿で鑑賞されるべきである、その中の思想のみを抽出して、とやかく論議すべきではない、というのは勿論正しい。事実、ブレイクのこれらの詩の一つ一つは、それぞれの内容に応じて、或いは至純な歓びを、或いは畏怖に満ちた驚きを、或いは骨身に徹するような憂愁を、力強い美しい韻律に乗せて響かせている。「歌」と彼が名付けた通りに、私たちはその快よい音楽に耳を澄ませて楽しんでいけばよい、とも言われよう。しかし、それはあくまでも一面の論理である。すべての詩人、或いは、すべての詩について主張すべきものではあるまい。ブレイクは特異な思想家であり、深い思索と独自の直感を秘めた哲学者であって、その思想を理解しないで、その詩を十分に味うことは、おそらく不可能であろう。今なお数多くのブレイク学者が次々に生れる所以である。「屋上屋を架する」と言われるであろうが、私ごとき後進にも、ささやかな発言を許されるならば、ここでブレイクの短い有名な詩の一つである 'The Fly' について、私見を述べさせていただくことにする。

'The Fly' (「蠅」) は「無垢と経験の歌」の中で、第二の「経験の歌」の部に

属している。この弱強二歩格を基調とする四行を一連とする、五連から成る詩は、見るからに、私たちの眼前を飛び廻る一匹の蠅の姿さながらに、可憐な形と軽快なリズムを持っている。その全文は下の通りである。

THE FLY⁴⁾

Little Fly,
Thy summer's play
My thoughtless hand
Has brush'd away.

Am not I
A fly like thee?
Or art not thou
A man like me?

For I dance,
And drink, & sing,
Till some blind hand
Shall brush my wing.

If thought is life
And strength & breath,
And the want
Of thought is death;

Then am I
A happy fly,
If I live
Or if I die.

ついでながら試訳を添えておく。

蠅

小さな 蠅よ
おまえの 夏の遊びを
何気ない わたしの手が
払って しまった。

わたしも おまえのような
蠅では ないのか。
おまえも わたしのような
人では ないのか。

ある 盲目な手が
わたしの翼を 払う日まで、
わたしも 舞い
飲んで 歌うのだから。

もし思想が ^{おもひ}生命で ^{いのち}
力で ^{いき}呼吸であるのなら、
また 思想の無いのが
死で あるのなら、

それなら わたしは
幸せな 蠅だ。
生きようと また
死んで ゆこうと。

これは不思議な詩である。ほとんど一音節の平易な言葉ばかりで出来ていて、その意味も一見明瞭のようにみえる。しかし、再読、三読してみると、誰でもどこか納得できない感じを抱くのではなからうか。この「わたし」と言っている語り手の思考の論理を、詩句の順序に従って辿ってゆくと、一応つぎのようになろう。

「夏のひと日、私は自分の周りをうるさく飛び廻っている蠅を、思わず払い

のけてしまった。蠅はおそらく死んだであろう。可哀想なことをした。しかし考えてみると、人間である私も、お前と同じ蠅のようなものではないか。また蠅であるお前も、じつは人間である私と同じものではあるまいか。何故なら、私もお前と同じように、束の間のいのちを、踊ったり飲んだり歌ったりして、楽しく過しているのだが、ついには、何か或る運命の力によって、あえなく息の根を止められてしまうのだから。けれども、もし思想を持っていることが、本当に生きていることであり、真の生ける力であるならば、また、思想を持っていないことは、死んでいるのも同然であるとするならば、それならば、私は蠅は蠅でも幸福な蠅だと言わなければならない。生きようと死のうと、私が幸福であることに変わりはないのだ」

この詩の語り手の論理が以上のようなのだとすると、私たちは、いやでも彼の論理の奇妙な矛盾、あるいは味腰さに気付かずにはいられないであろう。蠅も人間もいずれは死なねばならない、という所まではよい。しかし、「思想が生命である」とはどういう意味なのか。死ねば当然思想も消えてしまうのではないか。それなのに何故幸福だと言うのか。さらに、「If I live」はよいとしても、「If I die」というのは意味を成さないではないか、と。

以上のような疑問が、読者の心に浮んでくるのが当然であろう。それ故、ブレイクの研究家たちも、この詩の解釈にそれぞれの試みを行ってきたわけであるが、ここではその一つの例として、最近の著名なブレイク学者の一人である J・E・グラントの意見を取り上げて検討してみようと思う。

3

グラントはまずこの詩を解釈する第一前提として、この詩で「I」と言っている語り手が誰なのかを確定することが、最も重要な条件となると主張している。そして彼は、この語り手を、ブレイク自身、あるいは彼のような詩人と見なすところの、Damon, Kirschbaum, Bateson などのブレイク学者の意見をすべて不正確なもの、または甚だしく人を誤らせるものであると宣告する。グラントによると、この詩の語り手は、「経験の中の或る人間」(a man in Experience)なのであって、ブレイク自身ではないのは勿論、この「経験の歌」の冒頭で大地に向かって呼びかけている「うたびと」(the Bard)ですらない、と言う。彼に言わせると、「経験の歌」の中の各々の歌の語り手は、幾人かの異った人物であり、それぞれの経験を自分なりに歌うのであって、例えば「大地の答え」や「小学生」や「虎」などの詩の語り手は、明らかに先のうたびと

ではないのである。この区別を見落したために、キルヒバウムその他の批評家は、いずれも、この「蠅」の歌の解釈を誤り、或いは不十分なままで終ってしまった、と言う。それでは、グラント自身の正しい解釈とはどのようなものであろうか。

彼の詳細な論議を一つ一つ取り上げて、いたずらに紙面を費すことは避け、以下その要点だけをなるべく簡単に記すことにする。(読者の便宜のため、各連を再び掲げて、それについてのグラントの意見を記す)

1. Little Fly,
 Thy summer's play
 My thoughtless hand
 Has brush'd away.

上の第一連の三行目の *thoughtless* は、キルヒバウムの言うような *cruel* の意味ではなく、ただ単に *careless* あるいは *inconsiderate* の意味である。語り手は自分の不注意によって、思わず蠅を叩き落してしまったことを、後悔しているのである。

2. Ame not I
 A fly like thee?
 Or art not thou
 A man like me?

3. For I dance,
 And drink, & sing,
 Till some blind hand
 Shall brush my wing.

この第二、第三連において、語り手は自分と蠅との関係について考え始める。自分も蠅のように詰らぬものだと思えるのではなく、ただ同じように「死ぬるもの」だと思えるのである。しかし、彼はブレイクが晩年の詩「ミルトン」の中で、「蠅もお前と同じような心を、その内部は驚歎すべき広大な天国と地獄とに向って開かれている頭脳を持っている」と歌ったような、蠅に対する予言者的な洞察力や想像力を持ってはいない。「すべて生けるものは神聖なり」という、ブレイクがくり返し述べている考えも何も知っていない。彼はただ一寸死について考えたが、何が起ろうと構うものか、この果敢ない人生を、できるだけ愉快に過ごすだけだ、と決心しているように見える。

4. If thought is life
And strength & breath
And the want
Of thought is death;

5. Then am I
A happy fly,
If I live,
Or if I die.

この第四、第五連は、語り手の哲学的仮定および結論である。彼の推理は次のように進んでゆく。「私は特に深く考えるものではない。しかし私のやったことは私を考えこませた。もし、思考の深いことが、真に生きることであり、思考しないことが死であるとしたから、どうなるだろう。(しかし、そうだとすると、それが何だ。人はみな死ぬるものなのだ)」と。結局、彼の考えは、あのルバイヤットの中に登場する、刹那的快樂主義の人物のそれと同じである。もっとも、彼は、もし彼が考えるならば、そしてそれ故に(「思考は生命である」から)「生きる」ならば、彼もまた幸福になれると信じている。しかし、彼の日常の生活には考えるということは殆んど無い。彼はこの反省によって自己改革を行い、思考を深めようなどとは思ってはいない。読者は彼の言うことを聞くと、思考の深くない人間は、彼が考える時でさえ、生きるために人生について十分に考慮しないものだ、と感じるのである。

さらに、この第四、第五連においては、語り手の思考の欠陥を示す箇所が幾つかあることに注意せねばならぬ。

たとえば第四連の第二行は大いに曖昧であると言わねばならぬ。strength も breath も共に life の属性であると言っているのなら、語り手は自明なこと、または余計なことを言っているに過ぎぬ。また、第五連にはさらに大きな疑問を懐かせるものが含まれている。「私が生きようとまた死のうと、私が考えることさえすれば——考えることは生きることなのだから——私は蠅のように幸福になれる」と語り手は結論するのだが、このような不死性の哲学的意味を、彼はどう考えているのか、読者には殆んど発見できないのである。ウィックステードには、'If I live' という一行はどうしても最終的な説明を与えることができない謎であつたし、ベイトソンも 'If I die' という最後の行に散漫さしか確認できなかった。私も第二行の 'A happy fly' というのは、きわめて曖昧

な表現であると思う。

要するに、最終連には、「しまりのない」(loose) 結びが幾つかあると言われなければならない。⁹⁾

以上のように見てくると、この詩の語り手をもしブレイクだとすれば、この詩は明らかに不完全な代物であって、その責任はブレイクが負わねばならないことになる。しかし、この詩の語り手が、「経験の中の或る人間」であるとすれば、彼の認識のそもそも最初の原理から誤っているのだから、読者は彼の推論が十分な意味を成さないであろうと予期すべきなのである。しかし、ブレイクは、そのためにこの語り手を軽蔑しているのではなく、彼がただ鈍感で混乱しているのを悲しんでいるのである。

4

以上が私の読んで理解したかぎりでの、グラントのこの詩に対する解釈の要点である。さて、これについて私の意見を次に述べさせていただく。

まず、この詩の語り手はブレイク自身ではなく、「経験の中の或る人間」であるというグラントの前提であるが、「経験の歌」の中の各篇の詩の語り手が、それぞれ異った人物（といっても全部異なるわけでは勿論ないが）であって、或いは可憐な幼児であり、或いは惨めな煙突掃除の少年であり、或いは妻の嫉妬に悩む夫であり、決して全篇に亘って同一ではないのは事実である。しかし、外見上また形式上は異っていても、彼等のそれぞれの経験を、彼等に代って歌うのは、やはり同一の詩人なのであることを忘れてはならない。たとえばグラントは、「大地の答え」の語り手は、明らかに「序曲」で大地に向かって呼びかけている詩人ではないと言うけれど、それはあくまで表面上の形式にこだわっているからであって、悩める大地に代って答えているのも、大地の悩みを洞察し、それに同情し、それに表現を与えようとする同じ詩人の声なのである。「経験の歌」26篇の詩の一つ一つが、異なる「経験」を語っているからといって、その語り手が複数の人物であるとか、ましてや一人一人別の人物である（グラントもそこまでは言っていないが）とは、到底主張できるはずがない。これらの歌の一つ一つは、それぞれ、結局ブレイク自身が語っているのであることは、どのような理屈をつけて反対しようとしても、明らかな事実と言わなければならない。

さて、グラントによると、この「蠅」の歌は、結局、語り手が思考の浅い人間であるために、せっかく思考を試みたものの、幸福についても、生死につい

でも、首尾一貫した思考を貫くことができず、その結果、蠅の本性についても、人間の本性についても、誤った結論にしか到達できず、そのためにこの詩は不完全な姿の作品となってしまった、ということであった。ブレイクはこの詩の語り手の思考の誤謬を、誤謬としてそのままの姿で読者に提出し、彼の思想の浅さに注意を促し、彼を憐れんでいるのである、というのがその結論であった。

果してそうであろうか。私はこの詩の思想は首尾一貫しているし、語り手が誤った結論に達しているのではないと思う。ブレイクは、この詩の含まれている「経験の歌」の諸篇はもとより、「無垢の歌」の諸篇においても、一度も、誤った思想を、少くとも彼自身が虚偽であると知っている主張を、歌ったことはない。彼がこの「蠅」の詩だけを、徒らに読者を迷わせるに過ぎないような、外見上は真実のようで、内容は虚偽であるというような、手のこんだトリックを用いたとは、私にはどうしても考えられないのである。

それでは、この詩の中でブレイクが語りたかった真意はどのようなものであろうか。私は、ここで、この「蠅」の詩や「経験の歌」の多くが、その最初の草稿の形で残されている、ブレイクのノート・ブック（この詩集の刊行されるほぼ一年前頃までに書かれたと推定される）に眼を通すことが、彼のこの詩の創作過程での思考や気分を知る上で、きわめて役に立つと思う。

その草稿によると、最初は第一連として、次のような四行が書かれていた。

Woe, alas! my guilty hand
Brush'd across thy summer joy;
All thy gilded, painted pride
Shatter'd, fled...¹⁰

（ああ、悲しいことだ！ 私の罪な
手が、お前の夏のよろこびをはたい
てしまった。お前の金色の華やかな
誇りは、ことごとく砕け散った…）

この四行は、ブレイクがかってその挿絵を描いたこともある、かのトマス・グレイの 'Ode on the Spring'（春の頌歌）の中に出てくる蠅の描写の部分と密接な関係があることは、キャスリン・レインの指摘するところである。¹¹しかし、そのことはここでは余り重要ではない。注意すべきことは、この四行はすべて抹消されて、現在の第一連がそれに代り、二行目の guilty hand が, thoughtless hand と訂正されたことである。guilty（罪な）という表現は、語り手が蠅を殺してしまったことを、あたかも彼自身の意図から出た行為とも取れるこ

とを嫌って、それがただ当人の無意識的な思慮の無さから行われたに過ぎぬことをはっきりさせようとして、ブレイクがわざと改めたのであろう。

それよりもさらに私たちの注意を惹くのは、第一連の次に、つまり現在の第二連との間に、次のような独立した一つの連が作られていたことである。

The cut worm
Forgives the plow,
And dies in peace,
And so do you.¹²⁾

(切られたみみずはすきを赦し、
安らかに死んでゆく。それはお前
も同じこと)

上の四行は結局抹消されてしまったのであるが、最初の二行はブレイクの「天国と地獄の結婚」の中の「地獄の諺」の一つとして、そのまま再生されたのであった。それはともかく、上の抹消されたスタンザは、この「蠅」の詩の思想と深いつながりを持っている。みみずも蠅も（そして人間も）不慮の事故によって、「ある盲目な手」によって、死んでゆくが、そのことを彼等は「赦す」のであり、その死は安らかであるというのである。「盲目の手」というのは、みずから何をしているのか知らない力のことである。ここで私たちは、「彼等を赦せ。その為す所を知らざればなり」というイエスの言葉を思い出さずにはいられないであろう。

しかし、この草稿で最も私たちの注意せねばならないのは、最後の第四連、第五連の形と位置である。それは次のようになっている。

5. Then am I
A happy fly,
If I live,
Or if I die.
- [4 Thought is life
And strength & breath;
But the want
Of Thought is death.]

(上の四行は削除された)

4. If thought is life
 And strength & bereath
 And the want
 Of Thought is death;¹³⁾

上に見られる通り、ブレイクは最初の草稿では、第四連を第五連のあとで作
 り、しかも第四連は二通り作って、あとの方を最終稿として採り、順序を逆に
 して第五連の前に入れたのである。このことは何を意味するであろうか。まず
 考えられることは、最初ブレイクは第五連だけでこの詩の言わんとする意味は
 完結すると考えたということである。「何が起ろうと、要するに私は幸福なの
 だ」という結論を述べようとしたのである。しかし、それでは読者にとって、
 あまりに飛躍した結論の述べ方になると考え直し、その前提となる考えを示す
 ために、第四連を新たに作ったものと推定できよう。とすると、第四連はこの
 詩でのブレイクの基本的な考えを示すものとして、極めて重要な部分であると
 言うことができる。しかも、第四連の最初の草稿では、If thought is life で
 はなく、Thought is life であった。仮定ではなく、断定であったのである。
 さらに細かいことを言えば、草稿の二通りの第四連の第四行では、どちらも
 Thought という語が大文字で始められているのに気がつくが、これは、ブレ
 イクが或る語を強調したいとき、彼が若い時から死に至るまで、常に行ってい
 た彼一流のやり方であったことに注意せねばならない。

以上、細部に亘って余りにくどく述べたように思われるかも知れないが、こ
 れらのことは、これから述べるように、この詩の解釈に重要な意味を持つので
 ある。

5

結局、この詩の難解な点は、第四、第五の連にあると言える。私は、この詩
 の意味を解く上で最大の鍵は第四連にあると思う。そしてその中でも、第一行
 目の 'thought' という語が、決定的な key word となると思うのである。上
 に見た通り、第四連の最初の稿では If thought is life という仮定ではなく、
 Thought is life という断定であった。'If' というのは、ただ第五連の最初の
 'Then' に論理形式上対応するために、付け加えられたものに過ぎないと思う。
 キルヒバウムがこの 'If' を、事実上 'Since' を意味していると述べていると
 いうが、その通りであると思う。

さて、問題はこの 'thought' という語が、何を意味しているかである。私は、この thought という語に、ブレイクがどのような含みを持たせているかについて、その手懸りとなるものは、遺憾ながらこの詩の中には無く——この点でブレイクのやり方は十分に親切でなかったと言わねばならない——他の彼の書いたものの中に見出す外はないと思う。そして、事実、ブレイクは thought ということについて、いろんな場所で、重要な考えを述べているのである。たとえば、先に述べた「地獄の諺」の中では、

One thought fills immensity.¹⁴⁾

(一つの思想は無限界を満す)

と述べ、またバイコンのエッセイへの註では次のようにまで「思想」の価値を強調している。

Thought is Act. Christ's Acts were Nothing to Caesar's if this
is not so.¹⁵⁾

(思想は行為にひとしい。そうでなかったら、キリストの爲し給うたことも、カエサルのに比べれば、無にひとしいものとなるう)

しかし、とりわけ私が注目するのは、ブレイクがこの「無垢と経験の歌」の「無垢の歌」の部分を書いた1789年の頃、18世紀の神秘的思想家スウェーデンボルグの著書「神の愛と知恵に関する天使の知恵」(1788)に彼が書き込んだ註の数行である。それは次の通りである。

...If God is anything he is Understanding... Understanding or Thought is not natural to Man; it is acquir'd by means of Suffering & Distress i.e. Experience. Will, Desire, Love, Pain, Envy, & all other affections are Natural, but Understanding is Acquired...¹⁶⁾

(イタリックは筆者)

(もし神が何かであるとしたら、神は理解である…理解すなわち思想は人間にとって生れつきのものではない。それは受難や苦悩、すなわち経験によって獲得されるものである。意志、欲望、愛、苦痛、羨望およびすべての他の感情は生れつきのものである。しかし理解は獲得されるものである…)

すなわち、*thought* というのは *understanding* のことであり、さらにそれはブレイクにとっての「神」なのである。彼がいかにこの「理解」あるいは「思想」を重要視したかは、これよりずっと後年、彼が53才の時にノートに書いた「最後の審判の幻想」(1810)の次の一節によっても明らかである。

Men are admitted into Heaven not because they have curbed
& govern'd their Passions or have No Passions, but because
they have Cultivated their Understanding...¹⁷

(人間が天国に入るのを許されるのは、彼等がその情熱を抑制したり支配したり、或いは情熱が全く無くなったためではなく、彼等が理解する力を養ったがためである…)

以上、幾つかの引用によって今や明らかになったと思うが、この「蠅」の詩の中でも、ブレイクは '*thought*' というものを、人間にとって極めて重大なものと考えているのである。「思想」は無限性を持つものであり、行為に等しいものであり、神であり、天国に導くものなのである。「思想」は文字通り「生命」なのである。「力であり、呼吸である」というのは、グラントの言うような、曖昧なまたは余計な表現なのではなく、その通りこの語り手の心に感じられる、充実した、確かな生命の感じなのである。あえてブレイクが強調したのも当然と言わねばならない。

そこで、この詩の首尾一貫した意味を、改めて私なりに解釈してみると、次のようになる。

「私は思慮の無かったために、心ならずも、楽しく遊んでいる一匹の蠅を殺してしまった。悲しいことだ。そのことはふと私を考え込ませた。私もまたお前のように、いつか突然或る力によって命を奪われる運命にあるものだ。その点で、蠅であるお前も人間である私も同じものだ。しかし、私は理解している、すべてこの世に生きているものは神聖なものであることを、また、それにもかかわらず、いつか必ず死なねばならないとうことを、しかしまた私たちは、私たちを死に至らせるものを、結局は赦すということ。こうした真実を経験によって私が理解できたことは、じつは私が神の永遠の思想と一体となったこと、すなわち、神と共に在るということではないか。私たちは神の中に生き、神は私たちの中に生きている。この思想こそ私たちの真の生命であり、力の根源である。このことを理解しないでいる者たちは、生きていても死んでいるのと同然だと言うべきだ。けれど、このことを理解した私は、神と共に永遠の中に生

きている。たとえ蠅と同じく死なねばならぬものであるとしても、私は幸福な存在とわ言ねばならぬ。この世で生きようと、また死のうと、そんなことは問題ではないのだ」

もちろん、ブレイクの神は、ただ「理解」あるいは「思想」のみに尽きるものではないであろう。それは、彼の心に感じられたキリストであり、愛であり、生きるよろこびであり、また罪の赦しであった。しかし、それを理解し、その理解を万人のものとするのが、彼にとって終生の念願であり、すべての努力の目標であった。愛と知と生とが、ブレイクの思想全体の中で、どのような秩序を形造っているかは、大きな興味ある問題であるが、いまここでは論じることがない。この小論では、この短い詩にも、ブレイク独自の神についての思想が、いかに深く関わっているかを述べたまでである。

註

- 1) *Songs of Innocence and of Experience* (Reproduced by Oxford University Press, New York, 1977).
- 2) *Ibid.*, p. 13.
- 3) Sir Maurice Bowra: *The Romantic Imagination* (Oxford Uni. Press, London, 1969), p. 25.
- 4) *Blake Complete Writings*, ed. by Geoffrey Keynes (Oxford Uni. Press, London, 1967), p. 213.
(本稿中のブレイク原文の引用はすべて上記の版による。以下、C. W. と略記する)
- 5) John E. Grant: Interpreting Blake's "The Fly" in *Blake : a Collection of Critical Essays*, ed. by N. Frye (Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey, 1966), pp. 32-55.
- 6) *Ibid.*, pp. 35-36.
- 7), 8) *Ibid.*, p. 41.
- 9) *Ibid.*, p. 42.
- 10) C. W., p. 182.
- 11) Kathleen Raine: *Blake and Tradition, Vol. II.* (Bollingen Series xxxv. 11, Princeton University Press, New Jersey, 1968), p. 163.
- 12), 13) C. W., p. 183.
- 14) C. W., p. 151.
- 15) C. W., p. 400.
- 16) C. W., p. 89.
- 17) C. W., p. 615.